

〔新刊紹介〕

木村一信・竹松良明 編・解題

『南方徴用作家叢書「ビルマ篇」』

楠井清文

本書は一九九六年刊行の『南方徴用作家叢書 ジャワ篇』の続巻である。前者は永らく実態の不明だった「南方徴用作家」研究の基礎資料として、大きな反響で迎えられた。その待望の続巻であり、一一名の徴用作家が収録されている。内容は以下の通りである。第1〜3巻・高見順、高田秀二／第4巻・小田嶽夫／第5〜7巻・神山潤／第8〜9巻・豊田三郎、北林透馬、清水幾太郎／第10巻・山本和夫／第11巻・倉島竹二郎／第12〜13巻・岩崎榮／第14巻・平野零児、座談会・対談。

周知のように「南方徴用作家」とは、アジア太平洋戦争期に国民徴用令に基づき、一九四一年から四四年まで陸海軍に「宣伝班員」として徴用されマレー、ビルマ、ジャワ・ボルネオ、フィリピン各方面に派遣された文学者を指す。戦意昂揚のための戦

況報道と、南方占領地での文化宣伝工作が主な目的だった（神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家―戦争と文学―』）。本書は単行本、新聞雑誌に発表された未収録の文章、『ビルマ建設戦』『新生南方記』など合著に掲載された文章を余さず収録しており、彼らの活動全体を把握することができ

る。例えば北林透馬「ビルマの放送」「宣伝戦は如何に戦はれたか」、小田嶽夫「宣伝班文芸家として」には、具体的任務として伝単（ビラ）・ラジオ原稿の作成、布告の起草などが拳がっている。徴用作家の体験を考える場合に、まず「宣伝」の対象として現地住民を見ていたことを無視できない。そしてその枠内ではいかにもビルマ人やビルマ文化を認識したかを、個々の作家ごとに検証する必要がある。

この点で興味深いのは高見順である。一九四二年三月ランゲンに入った彼は、戦史編纂や映画検閲に従事し、四三年一月帰国した。『高見順日記』にはビルマ関連英書からの抜粋があり、ビルマという対象に肉薄しようとしていた様子が窺われる。その姿勢は帰国後出された『共栄圏文化ビルマ』にも共通する。高見はビルマ人を「怠惰」「未開」とする「西洋的偏見」に反駁し、日本人も「西洋人の唾棄すべき偏見」に侵されていないか、と論じる。ここには徴用体験を自己省察の契機に転じようとする態度が見られよう。

本書は復刻でなく原著に基づいて新たに版を組み、彩色版のページは色刷りにするなど、非常に資料性の高い造りとなっている。これらを活用しどのように「南方徴用作家」研究の新しい地平を切り開いていくかは、後続の研究者の課題として委ねられている。

（龍溪書舎 二〇一〇年二月 全一四巻
本体価格二二六、〇〇〇円）

（くすい・きよふみ 本学非常勤講師）